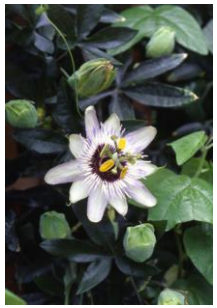

共同子育ての中に子どもがいる

ある日、散歩していて「この花、時計みたい」と子どもが言うので、見てみると花の形が時計の文字盤のようになっていました。いつもなにげなく見ていたその花は実際に「トケイソウ」という名前だったことにも驚きでした。

散歩の帰り歩きたくないと座りこんだ子。すると、近づいて手をつなごうと手を差し出す子。また、読んでる絵本を取られそうになったのに一緒に見よかと言った子。日々、子どもたちの気づきや関わりに驚かされることが多いです。そんなとき、心から子どもたちを尊敬します。そして、この世の中で一緒に生きているんだなと感じます。共同子育ての共同の中に子どもたちもともにいると考えるとしっくりきました。　＊ゆっこ

『おじゃまんぼう』しています。

「共同子育てって何？」「学習会を地元で！」「日常のもやもやを話したい」などと思っている人。ぜひ、ご連絡ください！！
また、地域での活動を深めたい！広げたい！お声もお待ちしています。
こちらからの、活動見学依頼をさせていただくこともあるかと思います。
今後とも、よろしくお願いします。

2022年3月19日『おじゃまんぼう』報告

ひさびさに「おじゃまんぼう」に行けました。
摂津にある「ＮＰＯ法人キッズぽてと（設立2002年）」さんです。「ちいさなおうち」というつどいの広場や一時保育などを運営されています。本当におうちの中のようで、来ている親子もくつろいで過ごされていました。
おじゃました日は、「くるくる市」というベビー用品や子ども服を自由に持ち帰ることができる日で、あれこれ楽しそうに選んでおられました。
他にも「プレママ、パパ向け講座」を日曜日に開催。沐浴の仕方やパパの妊婦体験など生まれる前から広場に足を運んでもらうきっかけ作りを工夫されています。産前産後の方の為のヘルパーとして訪問支援なども力を入れておられ、要望があれば、どんどん活動が増えていって「ちいさなおうち」の中に多様なかかわりがあふれていました。

共同子育て連絡会通信

創刊号　2022年３月

公益社団法人子ども情報研究センター共同子育て連絡会は、【新しい子育ち・子育て支援～子育て温泉】を広めたいと2011年に発足しました。この本は、「共同子育て」の理念を大切に活動するメンバーで発行しました。
子育ち・子育てに関わる人のつぶやきを聴きあった、私たち自身の活動の指針です。

私たちが連絡会を発足させた数日後、子ども情報研究センターの前身である、乳幼児発達研究所の時代にも、〈共同子育て連絡会〉があったと知りました。同時に、当時発行された冊子を回覧し、活動されていた人と一緒に語り合う場を持ちました。

2022年1月に実施した、第1回倫理綱領学習会を終え、40年前の冊子を手にした時の気持ちがよみがえります。今こそ、創造力をはたらかせ、子育ての共同化を求めていきたいと考えます。

今、この瞬間、世界の中で安心が揺さぶられています。幼い子どもたちが訳のわからない理由で、最大の暴力で痛めつけられています。私たちにできることは、考えること！語り合うこと！行動すること！…人権保育を推進すること、共同子育ての理念を持って活動すること、子どもの権利擁護に取り組むこと…センターの事業は、どれも倫理綱領でつながっていますね。

倫理綱領学習会　part２

日　時：2022年４月30日（土）10時～12時
場　所：子ども情報研究センター事務局　及び　ZOOM
対　象：どなたでも
参加費：無料
内　容：part１の続きから、倫理綱領２を読み込む。
オブザーバー：田中文子、山下裕子

公益社団法人子ども情報研究センター「共同子育て連絡会」合田由紀子　南田安紀子
電話：06-4708-7087　　メール：renraku@kojoken.jp

倫理綱領学習会　part１（2022年１月８日）報告

今年度の総会で倫理綱領案が出され、ひろば事業にどう落とし込めばいいか？との声をもらい、活動の原点を確認し合いたいと思いました。当日10時～12時、ひろばに関わり、次の3点について意見交換しました。

Keepしておきたいことは、「地元で続けること」「参加者ひとりひとりに向き合うこと」「情報発信」などが出ました。

Problemなことは、「限られた人の参加」「参加者のニーズに合っているか」「情報の有無による格差」「ネットワークの困難」などコロナ禍だけに関わらない問題がありました。それを受けて参加者の立場である人から「ひろばはそこにあるという安心感がある」と。オブザーバーからも「主人公は自分自身」「スタッフと参加者の対等性が大事ではないか」という意見が出ました。

ひろばとしてTryしていきたいことは、「相談しやすい場の提供」「孤育てしている人、妊産婦へのアピール」「新しい情報発信」などでした。

後半、倫理綱領Ｉを読んで感じることを話すうちに、私たちが日々もやもや感じることの正体が、倫理綱領の中で明らかにされているのではないかと気づきました。たとえば

・保育所で食べたくないと言ってる子どもに、無理強いしたが、子どもの意見表明権を知って考えさせられた。
・ひろばで、おもちゃを貸してあげるのがいい子でしょと、子どもをコントロールする場面にもやもやする。
・「アンパンマンって赤ちゃんやんな。もう6歳だから止めなさいって先生に怒られてた」と幼稚園の子から聞いた。センターのひろばに関わっているから、「何が好きか自分で決めていいよ」とは言えたけれど…

「まだまだいっぱいあるよね。子どもの権利が奪われている現実が。でも、この視点に気づかず、もやもやしない人の方がまだまだ多い？」など話しながら、そうさせている社会に、発信できることを考えていきたいと思いました。言語化することは難しいけれども「何で？」と思うことを出し合っていきましょう！

＊オオイヌノフグリ

自身の子育て中は、子どものことを他の人に手伝ってもらうなんてダメな母親と思われると考えていました。でもやっぱりひとりではできるはずもなく、、「共同子育て」という言葉に出会い「そんなことしていいの？」「みんなで子育てってできるの？」「社会で育てるってどうゆうこと？」と戸惑いながらも新鮮な気持ちになったのを覚えています。それからは、自分がしてほしかった子育て支援ー電話相談やつどいの広場、保育などさせてもらってきました。　何をどうしたら親も子も社会も居心地の良い暮らしができるのか、これからも共同子育てを探っていきたいと思っています。

＊合田由紀子

乳幼児を子育て中の保護者とおしゃべりしてふと思うのは、ホントによく頑張ってるなぁ、気持ちが張り詰めすぎてない？・・・よくよく聴いてみると「子どもは可愛いけれど、いつもいつも一緒だと気が抜けない。」「ひとりの時間が欲しい」「ワンオペ育児は私だけ？」「ときどき孤独を感じる」「２人目育児しんどい」「日々の出来事をちょこっと話せる相手がいると思うと安心」などなど、いろんなつぶやきが聴こえてきます。

コロナ禍での妊娠出産は、コロナ以前を知っている人にとってはやりにくさや閉塞感を感じているようですが、それを知らない人にとってはこんなものなのかなと、淡々と順応せざるを得ない状況の中で子育てが始まり、子どもどうしの関わりやおとなどうしの関わりを持つ場面に制約があり、以前にも増して難しいように感じます。

つどいの広場では、そんな保護者の方々の小さな声に耳を傾けながら、自分たちサイズのできることを、日々取り組んでいます。いまだ出会っていない方と出会いたい。子どもの育ちを見守るあなたのそばに、私たちも一緒にいさせてね♪という気持ちで関わらせていただいてます。　＊Ｋ

私の「共同子育て」の原点は地域の子育てサークルです。乳幼児と生活している仲間が集まり、知恵を出し合い、支え合っていました。おとなも子どもも主役で多様な価値観とも出会う刺激的で豊かな場でした。共同子育ての主役はみんな。「親」とか「母」とかの枠組みを取っ払い、子どもに出会う仲間が増えることで社会が変わっていくと信じています。　＊今橋千晶

子育て支援が政策となって30年。共同子育ては「家庭」や「母親」と子育ての縛りを解いて「共同化を」と言ってきたのに、「子ども庁」が「子ども家庭庁」に変えられたように、相変わらず「家庭」「母親」の呪縛の強い日本です。どんな活動をしていくのか話し合いたいです。　＊田中文子

＊ハルジオン

自宅の一室で、うちの子も一緒に、地域の子どもやおとなが出会い・あそび・生活する場が続いているのは、ニーズがあり、子どもが嬉しそうに来てくれたから。また、参加者が、卒業せずにできることはないかと、つながれたからだと思っています。

「あの頃が、今までの人生で一番楽しかった」と。あの頃とは…例えば、公園で遊ぼう～シャボン玉。当日、どの子も遊びやすいように配慮してくれるのは参加者の皆さん。子どものけんかも「少し見守りましょう」と互いに声をかけあう。時には、もやもやを受け止めあう。話し合う。もちろん、いつもそうはいかないし、傷つけられたと離れられることもあります。

＊Ｋさんがおっしゃるように、コロナ以前を知っている子どももおとなも閉塞感を感じています。だからこそ、感染予防に努め、子どもどうしが触れ合う機会は、できる限り保障していきたいと思います。うちの子もよその子も、保育所の子も地域の子も、子どももおとなも遊んじゃおう！

この通信の表紙に写真を載せた、水色の40年前の冊子を手にしたとき、古いのに新しい！と感じたのは、鈴木祥藏先生の「共同子育てのすすめ」や、当時の皆さんの声から希望を感じたからだと思います。私たちも、創造力をはたらかせ、ちょっとだけ大胆に～と思うのです。　＊南田安紀子

共同子育て　　今、思うこと